

高坂節三著「明治の教育」を読む

「寺子屋」から「義務教育」へ

1．明治維新から百年後の一九六七年、百科事典で有名なエンサイクロペディア・ブリタニカが、百科事典の付録として毎年出している追補年鑑の巻頭論文の寄稿を、昭和の宰相吉田茂に依頼した。『JAPAN'S DECISIVE CENTURY』という表題で書かれたこの論文は、その直後多少手を加えられ『日本を決定した百年』として日本経済新聞社より出版された。

2．第一章「明治の創業 冒険と成功」の中で吉田茂はこう記している。「とくに注目に値するのは、明治政府が教育の普及に力を尽くし人材の育成を図ったことである。明治の指導者たちは、国家を豊かにし、強くするには一般民衆の知識がすすまなくてはならないと考えていた。……だから、全国に学校をおこし、教育を普及させて、日本を根本から変えていこうというのが彼等の考え方であった」と。財政にゆとりのない政府に代わって、学校の設立を助けたのは地方の地主であり、一般民衆も徳川時代からの寺子屋教育の習慣から教育尊重の流れに呼応していったのである。

3．今は町の公民館と老人の憩いの場として利用されている鳥取県岩美町の元小学校校庭の一角に、明治三十三年八月と署名されている石碑が建っている。

「因幡村田後村は北海の部落にして、村を挙げて漁を以て業と為す。故に文字を解し、事理を曉る者寥寥として晨星のごとく、風俗は野にして朴、漁の暇さえあればすなわち相会して飽飲乱酔し、嘔吐喧こうす。因習の久しき常に以て俗を成せり、明治中興あり。主、学校を起こし、田後村も亦校舎を建て、呷唔の声を聞き、先生来たりて垂鐸するを得たり。時に佛庵の一隅を借り、設備完たからず。僅かに校舎に充てるのみ。先生諄諄として教えて倦まず。生徒群がり集まりて日々に盛んに校舎常に満たり。是に於いてか増築す。数年の後村中歴然として風を成す。……飽飲乱酔変じて忠孝を談じ節義を論ずるに至る。卒業の後、出身して官吏と為り、或いは教員と為り、或いは要人となり、其の他成立する所有り。寥寥たる一漁村をして文明の巷に到らしむるは、実に先生教育の致す所なり。誰か其の徳を思はざらんや」

田後尋常小学校創立者、佐々木階定を偲び、私の祖父、高坂長顕が書いた石碑であるが、恐らく日本中到處とこころにこうした教育者が輩出されたのであろう。

4．明治末年には就学率は九五%を超えたのである。そしてこうした教育者を養成するために政府は師範学校をつくり、「武士の商法」では成功がおぼつかない旧士族の多くが教育者になるため師範学校の門をくぐったのである。こうした旧士族は幕藩時代、少ない収入にも拘らず、治者として統

治の技術を身に付け、藩校で「実学」を学んでいたため、冒険心に富む指導者を育てる使命感をもっていたのである。

- 5 . 「校長教育についても、政府は高給を払って外国人教師を招いたり、日本人学生を外国に留学させて学者を育てることに気をくばったし、また、政府に参加しなかった知識人の多くは私立学校をつくって教育にあたった。こうして近代化のために教育を重んじたのは、日本の近代化の大きな特徴である」と吉田茂は綴っている。

P26 ~ 27

[コメント]

東京都教育委員の高坂先生の教育論。日本の未来を決定したのは、江戸時代に育った寺小屋を基礎に学制をしき、全国に小学校教育を義務教育として普及させたこと。では、今日すべきことは何かと考えた。

- 2010年2月7日 林明夫記 -